

# 黒帯、ふたたびチェンマイを行く ～縁と絆の半生～

写真・文 城戸可路



熱風の柔道家 三浦守さん

本誌101号(2007年6月25日発行)でご紹介した「熱風の柔道家」三浦守さんから久しぶりに電話があった。「日本から届いた柔道着をタイの子供たちに渡すんです。柔道着は山下からの贈り物なんです。これでやっと子供たちとの約束が果たせます」と嬉しそうだ。

101号でもご紹介した波乱万丈の半生については彼の著書「黒帯、インドに行く」を是非とも読んで頂きたいが、ここで簡単に触れると、1957年に鹿児島で生まれた三浦さんは地元・鹿児島実業～熊本・鎮西高校と名門校で柔道に打ち込んだ。1984年のロサンゼルスオリンピック無差別級で金メダルをとったあの国民栄誉賞の山下泰裕氏とは同い年でライバル校同士(山下氏は九州学院)の間柄。三浦さん曰く「山下の強さはハンパじゃなかった。誰がやっても秒殺で、何秒もつか計ったものでした。私?もちろん秒殺されました」

高校卒業後は大学進学の話もあったがなぜかマグロ漁船に乗ったり、縁あって「オシャマンベ～」の伝説的芸人・由利徹の内弟子として生活したのち、ふと思い立ってインドへ旅立つ。そしてカルカッタ

の街で、日の丸を縫い付けたリュックにぶら下げた柔道着が縁になって「センセイ!」と呼ばれるようになる。その後は講われるまま東南アジアのタイ、ラオス、カンボジア、マレーシア、中央アジアのカザフスタンなどで柔道を教えてきた。今年の5月には、2007年から年に数カ月間滞在しての柔道指導を行っているカザフスタン・ウラリスク市の学校に中古の青畳約220枚を届けた。それまで道場もなく教室にジュウタンを敷いて練習をしていた子供たちは大喜びだったとのこと。(8月15日の西日本新聞より)

彼の凄いとこは、その活動費を寄付などに頼らずに自ら汗をかいて稼いだ金を充てていることだろう。たしかに青畳は彼の活動に賛同した学校や警察署から譲り受けたものだし、輸送費は九州電力をはじめとする企業や柔道仲間からの寄付で賄うなど支援は受けている。しかし彼の渡航は格安チケット、宿はゲストハウス。国内移動は汽車やバスを利用しての貧乏旅行を今も貫いている。

そんな彼のことを、あの世界のヤマシタも密かに気にかけてくれているようで、今回、山下氏が理事長を務めるNPO法人・柔道教育ソリダリティーを通じて古着の柔道着100枚を送りたいという申し出があった。「山下が私のことを人づてに聞いて、気にしてくれていることは涙が出るほどうれしいのですが、100枚の柔道着を受け取りたくても叶わない私の状況をどうか理解してほしいです。決まった場所に落ち着いていない私には保管する場所が無く、一度に配る経費も無い現状では全部を受け取れるはずもなく、

結局今回は20枚だけを受け取ることにしました」

その20枚の柔道着は今回、チェンマイ市内にあるワット・ウェールアン小中学校、ランパーン県の軍施設内にある柔道クラブ、そしてバンコクの視覚障害者の柔道クラブへ贈ることになった。

11月某日、ワット・ウェールアン小中学校を訪ねると敷地奥のプールのそばに柱と屋根の下にマットを敷いただけのサーラー(東屋)のような質素な柔道場があり、三浦さんはいた。道場正面の壁には講道館柔道の創始者である「柔道の父・嘉納治五郎」の写真と日タイ両国の国旗がある。出来てまだ1年にも満たない柔道クラブだが、どの子供も礼儀正しく練習も一生懸命で、三浦さんの指導にも熱が入る。

この後はインドへ行き、1987年からの教え子であり現在はベナレス市で柔道を教えているラルール・クマール氏の依頼で合宿に参加しての柔道指導が待っている。合宿の後にはインドの全国大会があり、成績上位者は国際大会に出ることができる。偶然だがクマール氏の元にも山下氏から柔道着が届いたそうで、自分のことのように喜ぶ三浦さんだった。

そして年明けは再びカザフスタンへ渡って子供たちを指導するとのことだが、ロンドン五輪を目指すカザフスタンチームの強化を手伝ってほしいと講われながらも「忙しくて…」と二の足を踏んでいる三



熱が入った指導ぶり



質素な道場でも柔道の心は伝わります



世界のヤマシタから届いた柔道着



礼儀正しい子供たちと一緒に記念撮影